

## 詩篇103篇1-14節 「忘れない恵み」

### 1A 個人的恵み

1B 賛美への献身 1-2

2B 恵みと憐れみの冠 3-5

### 2A 普遍的恵み

1B 虐げられた者たちのための正義 6

2B 主の憐れみ深さ 7-12

3B 子に対する憐れみ 13

4B 塵のような成り立ち 14

## 本文

詩篇 103 篇を開いてください、103 篇の 1 節から 14 節までを見ていきます。午後は、101 篇から 104 篇までを一節ずつ見ていきますが、今朝はこの箇所注目します。私たちは前回、「心をかたくなにする」という問題、「主を試す」という問題を、95 篇から見ました。イスラエルの民が、エジプトから救い出されて、神が彼らにパンと水を与え、彼らを守り、養っていたにも関わらず、その目の前にある試練に出会うと強い不平を鳴らし、そのため約束の地に入れなかったという話です。私たちが、主のしてくださった良きことを正しく数えていなかったために起こった問題です。

今朝は、その反対のことを読んでいきます。つまり、主のしてくださった良きことを忘れずに、それを覚えて、主をほめたたえることです。私たちは、しばしば自分が主に対してきちんと捧げているのではないかと不安になったり、あるいは自省しているかもしれません。けれども、多く忘れられているのは、主が私たちのためにどれだけご自身を捧げてくださったかを思うことに献身していないことです。自分自身の行ないたいことには力を入れますが、主が行われたこと、また行なわれていることには軽視します。

しかし、私たちは、自分たちが主のためにしていることよりも、主が私たちのためにしてくださったことが、聖書の主題です。「初めに、神が天と地を創造された。」という聖書の初めの言葉を思い出してください。そこから神主体、神の恵み主体の物語が始まっています。言い換えれば、神の恵みによって生きることです。そうすれば、自ずと神のために働く応答をすることができます。自分が神を熱心に愛していないという悩みを持っているならば、実は神が情熱をもって自分を愛しておられるということを知らないから、そうなっているのだということに気づいていません。神の愛の中にあるならば、自ずと神の命令を守るからです。

ですから、主のしてくださった良きことを忘れないという献身をまず、神にしていくことが必要です。

## 1A 個人的恵み

### 1B 賛美への献身 1-2

103 ダビデによる 103:1 わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。103:2 わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くてくださったことを何一つ忘れるな。

ダビデが歌っています。ダビデが、自分の身に良きことばかりが起こっているわけではありませんでした。彼の若き日は、主君であり義理の父であるサウルに追われていました。そして、彼の後世は自分自身の息子に王位を奪われました。ですから、彼は不平を漏らす材料は際限なくすることができたはずですが、しかし、もちろん多くの祝福もありました。ダビデは、不満ではなく祝福のほうを数えることを決心したのです。

感謝をすること、賛美をすることは、強い意志の伴う営みです。私たちの心が、いつも主に対して感謝し、賛美をしているということは、その心をいつも主に向けて、主のなされていることを見つめ、そして喜ぶという信仰を十分に働かせる勤勉が必要となります。牢獄に入れられているパウロが、ピリピにいる兄弟たちに対して、「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。(4:4)」と言いました。今、ここでダビデは、主を思いの中だけでほめたたえていません。心の中でさえも、その賛美は足りません。そうではなく、「私のうちにあるすべてのものよ。」と自分の全身を使って、思い、心、そして力も尽くして主をほめたたえているのです。

私たちキリスト者は、食前に感謝の祈りを捧げますが、どこかの注解で、ユダヤ教徒は食後も感謝するということを読みました。私たちは何かの恵みにあずかれる前にそれを感謝しますが、恵みに預かった後に、その感謝を言い表すということは忘れずね。十人のらい病人の話思い出します。イエス様に、「どうぞあわれんでください。」と叫びました。イエス様はこれを見て、「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」と言われました。すると彼らはみな行く途中で癒されました。そして、自分の癒されたことが分かった人は、大声で神をほめたたえながら引き返してきて、「イエスの足もとにひれ伏して、感謝した。(ルカ 17:16)」とあります。この感謝の礼拝を捧げたのは、十人中、たった一人でした。このように、感謝するということは簡単なようで、実は難しいことなのです。

### 2B 主のされた良きこと 3-5

103:3 主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、103:4 あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、103:5 あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。

ダビデが、自分のすべてをもって主をほめたたえることのできた理由が、ここに列挙されています。私たちが、なぜ感謝や賛美が心から、思いから無くなっていってしまうのか、その原因も探ることが出来ます。

一つに、「すべての咎を赦」されたということです。自分が神の前に曲がったことをしてきたという意識、その咎があったという意識がなければ、自ずと赦される必要性を感じません。恵みや祝福というものが、自分の周りの事柄が思う通りにうまくいったなどの生活の中での表面的な変化で推し量ろうとします。そこに、大きな変化がなければ、あるいは悪化すれば祝福はなくなった、と感ずるので。しかし、神の良きことの初めは「咎が赦された」ということです。咎が赦されるためには、初めに自分に咎があることを知る必要があります。

私たちは、何か自分に不都合なことが起こると、それは自分の責任ではないという弁解を即座に行います。それは、普段から自分が設けている基準や規則があるからです。しかし、問題は自分の設けている基準でさえ完璧に守ることはできていないのです。したがって、アダムのように、「あなたの造られた、あの女が私に実を渡したのだ。」という責任転嫁をしようとする。そして、自分はさほど悪くないと強迫観念のように、思いこまないといけないのです。箴言には、「自分をきよいと見、汚れを洗わない時代。(30:12)」とあります。

私たちは常に、他者と比べて自分の義を押し量っています。けれども人間が本来しなければいけないのは、自分を造られた方、神と比べることです。神のかたちに造られたのですから、この方に似たものになっているのかどうかを調べるのです。イエス様が、「天の父が完全なように、完全でありなさい。(マタイ 5:48)」と言われた通りです。これでは、どんなに正しくなろうとしても不可能であることを知るでしょう。イエス様は、「金持ちが神の国に入るより、らくだが針の穴を通るより、たやすい」ということを言われました。自分が神の前に曲がったことを行なってきたことは、自ずと分かるのです。それで「すべての咎」となります。咎の一部ではなく全てです。「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。(1ヨハネ 1:7)」

そして、「赦す」という言葉も大事です。日本語でしばしば、許可の「許す」という言葉に間違えられます。漢字変換で許可の「許す」が出てくる、ということもありますが、実際にそのようにみなされていることが多いです。罪を赦すというのは、決して罪を犯してもよいと許可することではありません。ある人が悪事を働いているのを、私は「決して許しません。」と言ったとします。そしてもし、誰かが「クリスチャンは罪を赦さなければいけないのに、どうして赦さないのですか？」と尋ねるとします。その質問自体が、罪の赦しの意味をはき違えています。悪いことを誰かが行っている時に、その悪事を許容することでは決してないのです。罪の赦しには、したがって必ず罪からの悔い改めが必要であります。相手が悔い改めることがないのに、罪の赦しも何もありません。

しかし、罪を犯したことを悔いて、その赦しを請う人には、豊かに赦さないといけません。その時の赦すとは、過ぎ去らせることです。その罪を持ちださないことです。その罪をもって相手を責めることをやめることです。ですから、神は私たちのすべての罪を赦してくださいました。それは罪を犯してもいいのだという許可ではなく、罪を思い出さないということでもあります。

そして、「あなたのすべての病をいやし」とあります。聖書では、罪を犯すことと病が密接につながっていることを教えています。罪を犯しているのを、傷を受けているというように表現します。「私の民の娘、おとめの打たれた傷は大きく、いやしがたい、ひどい打ち傷。(エレミヤ 14:17)」罪を犯すことによって、魂に損傷がきます。そして罪を犯す者は必ず死ぬ、すなわち肉体の病と死ももたらします。それで、イエス様は罪の赦しのために、その御体に傷を受けられたのです。「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。(イザヤ 53:5)」日本また他の国でも、異教においては、病は自分自身の行なった業の報いであるとか、先祖が過去に行ったことのせいであるとか言いますが、それは私たちを束縛するだけです。しかし、聖書によれば、病はすべてイエスが身代わりに打ち傷と十字架によって負われたことを教えています。私たちが、この方に直接自分の負っている、霊的な、また肉体の病をこの方の受けられた傷につなげるときに、束縛ではなく、確かに解放されるのです。

そして、「あなたのいのちを穴から贖い」とありますが、これはダビデが死から救い出されたことを話しています。サウルの手から免れ、アブシャロムの手からも免れました。あらゆる苦しみから主は彼を救い出されました。そして、これは私たちにも当てはまります、罪を犯せば、魂が損傷を受け、魂が損傷を受ければ肉体の滅びも来るのだ、ということです。罪から来る報酬は死です、そして人は死ぬことと、死後にさばかれることが定まっています(ヘブル 9:27)。その死の恐怖からも、神は私たちをキリストの死によって救い出してくださいました。

そして、「あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ」という表現は、何と麗しいことでしょうか。冠をかぶせるということは、王のようにみなすということです。それは、神がまるで私たちを王のようにみなすほど、恵みと憐れみを注いでくださる。そのような特別視された存在なのだ、ということです。放蕩息子が、指輪、衣、靴も与えられ、大きな祝宴によって受け入れられたのと同じです。「恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりの人イエス・キリストにより、いのちにあって支配するのです。(ローマ 5:17)」私たちは何と、神の恵みにより義と認められるので、キリストによって命により、世界を支配するのです。「キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。(エペソ 2:6)」神の右の座にイエス様は今、着いておられますが、共に天の所に座らせてくださっています。

私たちは神の国をどのように想像するのでしょうか？ 私たちが力強くなって、それで王となり、キリストと共に統治するのでしょうか？ いいえ、詩篇 8 篇 2 節には、「幼子と乳飲み子たちの口によって、力を打ち建てられました。」とあります。小さな子供が、全き信頼をもって神をほめたたえる、その神への拠り頼みをもって、神ご自身が力をもって支配されるのです。私たちは、今からそうありますように。私たち自身を見たら、何でもない人なのです。何か優れた資質を持っている訳ではないのです。ところが、私たちを見たら、どうしても神が働いておられる、神はすごい方なのだ、と神の恵みと憐れみの冠が載っていることを見ることができるようになりたいです。

そして、「あなたの一生を良いもので満たされる。」とあります。一生というのは、「口」と訳すこともできるものです。あるいは「飾り」とも訳すことのできるものです。口であれば、私たちは一生のこと満ち足りた生活をするということできます。「私は、貧しさの中にある道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。(ピリピ 4:12-13)」

そして、「あなたの若さは、わしのように、新しくなる。」とあります。これが、霊的生活の醍醐味です。信仰生活が長くなればなるほど、広がっていく神の国が楽しくて、それに関わらせていただくことをものすごく喜んでいます。外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされているからです。私の尊敬する牧者、カール・ウェストランドさんは、スクール・オブ・ミニストリーの校長です。彼の特徴は、いつも何かやる気を出していることです。長男が私と同じ年ということで、かなり年を召した方であることが分かるかと思いますが、彼はワッツという、ロサンゼルスに非常に危険な地位に、弟子を作るための学校を卒業生の牧会者を通して始めることについて、「やった！」と手を上げて喜んでいたので思い出します。信仰生活が長くなると、新鮮味が衰えるのではないかとご心配の方は、完全に裏切られてください！ますます新たにされます。

## **2A 普遍的恵み**

ここまで、私たちが忘れてはならない恵みを見ました。しかし、ここで大事なことは、私たちは個人的に受ける神の恵みだけに終わってはいけない、ということです。これからダビデは 6 節以降で、全体に注がれる普遍的な神の恵みについて話していきます。もし私たちが、自分自身のことだけに神の国を関連付けるのであれば、つまり、自分の魂、また自分にごく近い人々の魂だけに関心があるのであれば、次から読む神の御心に感動することはないでしょう。

### **1B 虐げられた者たちのための正義 6**

103:6 主はすべてしいたげられている人々のために、正義とさばきを行なわれる。

主の目は絶えず、虐げられている人々の所に届いています。イスラエルの民がエジプトで苦しんでいる時に、主はその声を聞いて、また見ておられました。それを可哀想だなと同情しただけではなく、実際にエジプトから連れ出すという行動にも映られたのです。これが、神の正義と裁きです。神は、行動に移すまでの憐れみを持っておられる方だということです。イエス様はご自身の憐れみを教えるために、良きサマリア人の話をされました。半殺しになって倒れている男のところを、レビ人も、祭司も通りすぎましたが、一人のサマリア人は彼を助け、看護し、宿屋にまで連れて行き、その宿代まで支払いました。それは主ご自身を示していましたが、そのような憐れみなのです。

イエス様は、「憐み深い者は幸いである。その人は憐れみを受ける。」と言われました。自分自身が神から憐れみを受けたのだから、同じように他の人々を憐れみます。そして、その憐れみは全



での虐げられている人々のためであるから、私たちの目はあらゆる虐げられている人々に向かうわけです。私の尊敬する人の一人は、フランクリン・グラハムです。彼は、分け隔てなく世界各地に行き、そこにいる人々にキリストの十字架にある神の愛を伝えます。そして彼は世界中の貧しい地域、特に虐げられている人々のいるところに援助物資を運んでいきます。そこには、分け隔てがやはりありません。そして、自分の国のためにも執り成して祈ります。オバマ大統領のしていることを叱責しながらも、それでも愛をもって真実を語り、決して黙ってはいません。

私たちは、自分のしていることがいかに広がっていくか、と、自分を軸にして物事を考えます。これは自己実現であります。クリスチャンでさえ、その自己実現型の働きをしたいと思っています。しかし、聖書は神実現の世界を描いています。神が実現される世界を幻で見せておられます。その御国の中の一部が、すべての虐げられている人への正義と裁きなのです。これだけの広がりを持っている、神の国と神の義です。これを求めて、その中で、主が自分の周りで自分を通して行われることを与えておられるのです。

## 2B 主の憐れみ深さ 7-12

103:7 主は、ご自身の道をモーセに、そのみわざをイスラエルの子らに知らされた。103:8 主は、あわれみ深く、情け深い。怒るのにおそく、恵み豊かである。103:9 主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。103:10 私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。103:11 天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。103:12 東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。

主は、イスラエルの民に対する恵みを思い起こさせています。かつてモーセに、ご自身のことを憐れみ深い、情け深い。怒るに遅い、恵み豊かであると啓示されました。それに従って、イスラエルが反抗したけれども、いつまでも怒っておらず、その咎にしたがって報いることはないと言われています。

そしてその恵みの高さ、広さを述べています。ここの「恵み」とは、ヘセドと呼ばれる言葉です。神の好意であり、真実な愛のことです。する必要もないのに、約束して必ず成し遂げる愛です。それがいかに高いものであるかを言い表しています。なぜ恵みが下に行かず、上なのでしょう？それは、神は天の御座におられるからです。死んで裁きを受けなければいけない者が、神ご自身の天にまで及ぶ恵みを与えてくださいました。私たちは、天の幻をいつも持っています。それは、キリストが信じる者たちの間で満ちる時に、私たちはそこに天国の実体を体験できます。そして、主が天から来られて、私たちを引き上げてくださるからです。

そして、罪については東西が遠いように、引き離してくださいます。日の上るところから沈む所まで、自分の目にする最も遠い距離において、神は罪を引き離してくださいます。ですから、ここでも

世界的な広がりをもって、罪の赦しが説かれているのです。どこまでも、どこまでも罪に到達することのできない国、それが神の国です。神は、自分が持ちだそうとしてもはるか遠くに引き離して下さったのですから、その解放の中で心を癒され、解放され、その豊かな寛容の中に浴してください。そして、どこにいても罪の赦しを得るキリストの言葉を持って行くべきなのです。

### 3B 子に対する憐れみ 13

103:13 父がその子をあわれむように、主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。

神の恵みは、私たちが神を父とし、神が子とするという関係にまで及びます。これは、揺るぎない愛の関係です。子も父に対して、父の命じられることのみを行っていくという愛を持っています。

私たちの心には、行ないによって評価を得ようとする肉の性質が作られています。いつの間にか、自分が神に対して、学校の生徒であるかのように評価されている人なのだと思います。それで、今日は五十点、次の日は七十点、その次の日に三十点になってしまったと思っているのです。残念なことに、家庭の中でそのように自分の頑張りによらなければ親の愛を確認できないということもあり、家庭までが学校のようになっている場合があります。しかし、父と子の関係は変わらない愛なのです。子と父の関係であります。

### 4B 塵のような成り立ち 14

103:14 主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。

これが、神の恵みと憐れみの冠をかぶせてくださる、神の動機であります。私たちの成り立ちを神は知っておられます。塵に過ぎないことを知っておられます。すぐに滅んでしまうことを知っておられます。だからこそ、神は義にとらなないで、恵みによって取り扱うことを決められました。神はノアの時代に洪水を与えられて、新しい世界にされたとき、ノアの捧げる全焼のいけにえの香りをかぐわれ、「わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことをすまい。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。(創世 8:21)」と言われました。もし悪のゆえに裁くのであれば、何度、洪水で滅ぼしても足りないのです。初めから悪なので、また悪を行ってしまうのです。それで神は、ご自分の義ではなく、ご自分の恵みによって取り扱うように決められたのです。

これで、自分が一方的に神の憐れみによって存在していることが、お分かりになったでしょうか？生きていて当たり前だではないのです。今、生きていることは神が憐れんでおられるからであります。預言者エレミヤが言いました。「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。(哀歌 3:22)」